

# 「表と裏」による新たな空間秩序の研究

—心理的概念による空間評価指標と空間設計手法—

## Study of New Spatial Order by “Omote-Ura”

—Spatial Evaluation Index and Spatial Design based on Psychological Concept—

■ 服部 秀生 Shu HATTORI

愛知県立芸術大学大学院 夏目知道研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：表と裏、空間秩序、建築

### はじめに

近年の国際化／多様化や今日のコロナ禍におけるオンラインとオフラインの混在を含め、元来のコミュニティや生活様式などに伴う様々な空間秩序が激変している。その中で、これからの都市や生活風景がどのように変化すべきかを考える必要がある。例えば、昨今言われる「職住近接」は職と住、都市と個人との繋がり、あるいは「職住一体」のような生活との連続性が求められている。そこで重要になるのは、瞬間に変化していく両者の関係性である。

本研究は、心理的概念である「表と裏」の性質・関係性に着目し、現状の空間秩序を再考し、再定義することを目的とする。

### 1. 2020 年度研究

一年次では、「表と裏」を「建前と本音」に代表されるような心理的な面での概念である「心理的表裏」と、空間認識として表と裏に分けられている物理的な概念である「物理的表裏」に分類・定義を行った。また、主体的視点を持つ「心理的表裏」と客観的視点である「物理的表裏」を横断思考することで既存空間の分析、両者の相関性の検証を行った(図 1)。

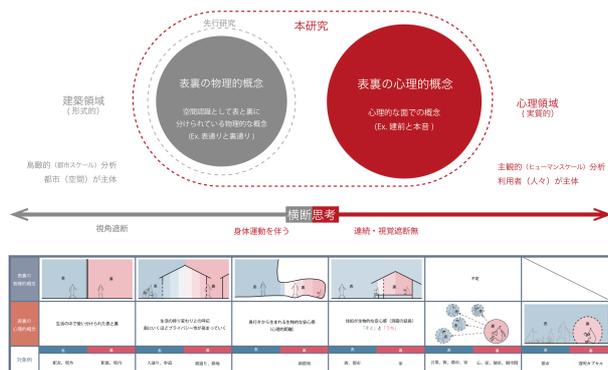


図 1 「心理的表裏」と「物理的表裏」

「心理的表裏」と「物理的表裏」の要素抽出を元にしたマインドマップによる分析から、「表と裏」のそれぞれを形作っている物理的要素から二つの心理的要素へと相関していることが判明した。具体的には、心理的要素が多くなるほど物理的要素が減少していく結果となっている(図 2)。

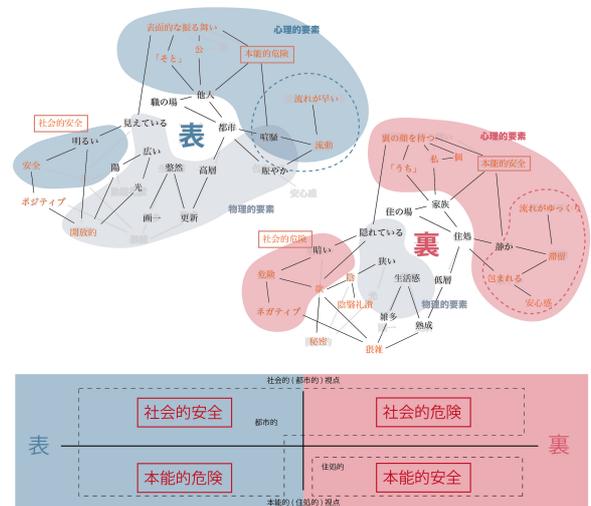


図 2 「心理的表裏」と「物理的表裏」の相関マインドマップ

### 2. 心理的表裏の性質

上記の先行研究を踏まえ、「心理的表裏」の性質を4つに分類した。

①相対性:ものごとは表裏一体の関係性を持ち、表と裏のどちらかが失われても成立しない。「表は裏が存在することで成り立ち、裏は表が存在することで成り立つ」ように相対的な関係性であると言える[注1]。

②両義性:建前と本音のように「本音だけでは世の中では

生きていけない」という側面と、「建前だけでは我を失ってしまう」という、相反する関係性がアンビバレント(両義性)であることで存在が成り立っている。それはある対象に明確な性質を与えず、反転可能性を含ませることであるといえよう。

③視点移動性:視点は、表から裏へ、裏から表へ連続性を持って移動可能であるという性質を持つ。視点が移動することで表と裏が反転し、自分にとって外であるものも外に属する人にとっては内となる。空間における「奥行き」が持つ心理的な距離についてはこの性質に分類する。洞窟のような仕切りのない連続した空間でも入り口から奥に移動するにつれ、パブリック(公)からプライベート(私)への心理的变化が生じる。これは外敵から身を守るという生物学的な安心感と共に、領域を分割するような仕切りなしにシームレスに表と裏の反転が生じていると言える。

④表出性:「全体」である裏から、「部分」として表に表出する性質がある。話すという行為は、「心」の中から場面によって適した一部を切り取り「言葉」として表出させることである。「心」で考えているほんの一部が「言葉」として表出している関係性は、人々が所属する各コミュニティで見せるそれぞれの顔の関係性と同じである。それらは自然と使い分けられており、裏である「個人・個」から表である「社会・公」に部分を次々と表出させながら生活していると置き換えることもできるだろう。

### 3. 空間設計手法の確立

#### 3.1. 心理的表裏から抽出する空間モデル

心理的表裏の性質分析から得られる物理的要素を抽出しモデル化を行った(図3)。また、心理的表裏の4つの性質は「両義性」「相対性」より、自分と他者との関係性が発生し、「視点移動性」によって表から裏へ、裏から表へ主体による変化(行為)が生じる。そしてそれらの関係性によって心理的表裏の「表出性」が成り立つ(図4)。

| 心理的表裏の性質                                          | 心理的表裏の性質から抽出される物理的要素          | 物理的要素                         |
|---------------------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| <b>1. 両義性</b><br>一つの空間に異なる性質を同時に持つこと<br>Ex: 建築と本音 | 両義性<br>空間の両義性<br>空間の両義性       | 両義性<br>空間の両義性<br>空間の両義性       |
| <b>2. 相対性</b><br>一つの空間に異なる性質を同時に持つこと<br>Ex: 建築と本音 | 相対性<br>空間の相対性<br>空間の相対性       | 相対性<br>空間の相対性<br>空間の相対性       |
| <b>3. 視点移動性</b><br>視点の移動による空間の連続性<br>Ex: 建築と本音    | 視点移動性<br>空間の視点移動性<br>空間の視点移動性 | 視点移動性<br>空間の視点移動性<br>空間の視点移動性 |
| <b>4. 表出性</b><br>空間の両義性から抽出される性質<br>Ex: 建築と本音     | 表出性<br>空間の表出性<br>空間の表出性       | 表出性<br>空間の表出性<br>空間の表出性       |

図3 「心理的表裏」の性質表と空間モデル

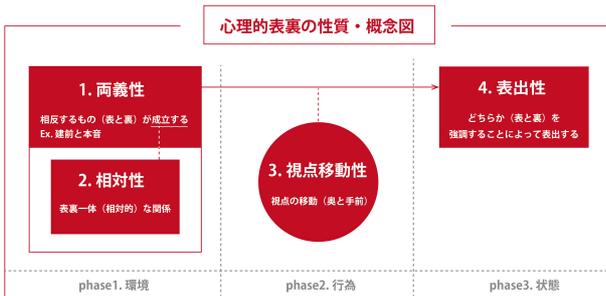


図4 「心理的表裏」の概念図

### 3.2. 三要素による空間評価指標

「心理的要素」「物理的要素」「行為の要素」の三要素を各事例から抽出し、関係性を分析することで既存空間の空間評価指標を行った(図5)。例えば茶室の場合、四方囲われた小空間と躡口という境界線の物理的要素と、「躡口を体を窄めてくぐる」という行為の要素によって外界との切断が生じると言える。それは心理的要素である視点移動性によるものである。

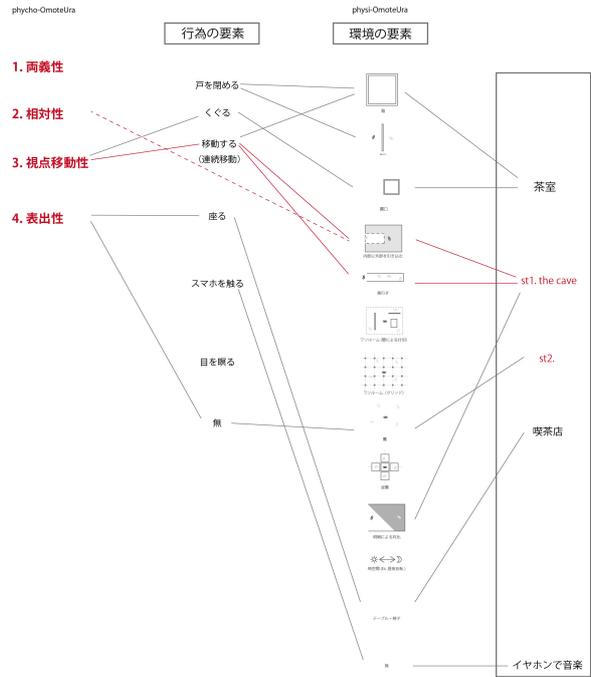


図5 三要素による空間評価指標

### 4. 実空間への応用

#### 4.1. 外的要因による相対的設計手法

前項で分析した心理的表裏の性質を実空間へと応用する設計手法を検討する。たとえば風土という地域ごとの外的環境に順応するために「建築」がつくられる。同じく、社会生活での他者との関係性の中で、表の顔と裏の顔を使い分けのように、社会生活に順応するために「表と裏」という心理概念がある。上記の二者とも、「ある外的要因に順応し、社会生活を営むための手法」であると捉えられる。すなわち、ある外的要因に対して相対的に「表」と「裏」の関係性をつくる相対的設計手法を行う(図6)。

手順1:ある場所にあるコンテキストを外的要因として設計空間が立ち現れる。

手順2:その「外環境と設計空間」が「表と裏」の関係性を生む。例えば、オフィスという「流動」のリズムを持つ「表」に対し、「滞留」のリズムを持つ「裏」を挿入することで、「流動」と「滞留」の相対的なリズムが生まれる。

手順3:相対的關係性を持つ「表と裏」は片方が表裏の反転を起こした場合、相対的に他方も反転する。例えば、昼夜によって街自体が反転を起こす繁華街(表)における住宅や

ホテル(裏)のあり方といったような、相互的に作用し合う関係性を持つ。

また西欧的な強固な組積造で外部環境とは切り離され、内的要因(哲学・思想等)から導き出す設計手法に対して、外的要因による設計手法は自然との調和を生む軸組工法のように外部環境を受け入れ、取り込むといったような日本的な設計手法とも言える。

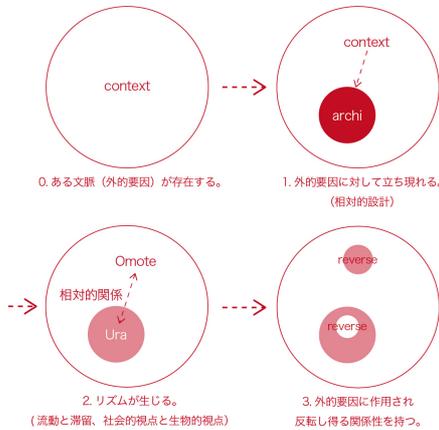


図6 相対的設計手法

#### 4.2. 性質の空間化

各心理的表裏の性質を用いてモデル化を行った。両義性から抽出されたモデルでは、既存空間のように明確に空間の質が与えられた固定的な空間に対し、ひだ状の仕切りによって表裏が反転するような空間性を持つ。また、相対性から抽出されたモデルでは、明確な壁によって遮断された空間に対し、表が存在することで裏が存在し、裏が存在し面が存在するという互いに影響を受け合う関係性を持つ。視点移動性から抽出されたモデルでは、空間同士を扉などで遮断する非相対的な空間に対し、奥行きを持つ空間で利用者の身体移動に伴って心理的変化が生じる。

また概念図より、上記の二つの環境要素、一つの行為要素の性質の上に状態としての表出性を獲得することが可能になる。表と裏が存在する両義性・相対性の上で、視点移動性による「身体移動による表裏の反転」と、喫茶店で本を読んでいるような「身体移動を伴わない表裏の反転」が誘発される(図7)。以上の空間要素を用いて住宅、オフィス、パブリックスペース(広場)に与える影響のケーススタディを行った。

|               | CLASSIC SPATIAL ORDER |          | NEW SPATIAL ORDER                                           |                                   |
|---------------|-----------------------|----------|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------|
| phase1.<br>環境 | <p>固定的空間</p>          | 1. 両義性   | <p>アンビバレンツな空間<br/>≠フレキシブルな空間(無性質)<br/>=相反する表と裏が成立する空間</p>   |                                   |
|               | <p>完全遮断</p>           |          | <p>レイヤーによる変化<br/>=場所によって表裏が変化する</p>                         |                                   |
| phase2.<br>行為 | <p>完全分離</p>           | 3. 視点移動性 | <p>相対的な関係性<br/>=影響を受け合う関係(≠完全遮断)<br/>=表があることで裏があるという関係性</p> |                                   |
| phase3.<br>状態 | <p>無属性</p>            |          | 2. 表出性                                                      | <p>奥行き<br/>=身体を伴う連続的な視点移動</p>     |
|               |                       |          |                                                             | <p>表と裏が存在していること=条件:両義性が成立している</p> |

図7 「心理的表裏」を用いた新たな空間秩序

## 5. ケーススタディ

### 5.1. case1 「住宅」

前項より抽出された心理的表裏の空間要素である「ひだ」によるパンチングメタル製の壁面と、住環境として必要な内と外の矩形を重ね合わせ建築化させた。室内室外という温熱環境による境界と、そこでの暮らしの中で変化し続ける表と裏の境界が互いに干渉し合うようにした。かつての住処に対する欲求に近い、隠れたい時に裏に行き、また表に出るような心理的で主体的な視点を用いて暮らす快適性を獲得しようという意図がある。そうした空間においては住と職の場が同居し、表と裏の反転によって成立している(図8)。

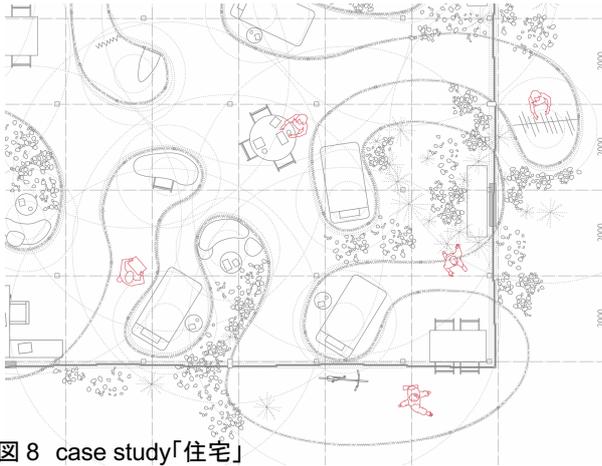


図8 case study「住宅」

### 5.2. case2 「オフィス」

case2 ではスケルトンとしての内と外の境界に対し、インフィルとなる表と裏を挿入するプランである。敷地境界と外壁ラインが重なる本プランでは内に挿入された「ひだ」がファサードとして現れ、外(前面道路)に対しての「ひだ」としても機能する。「ひだ」の形状にはエドワード・ホール著「かくれた次元」で提唱されたスペーシングのモジュールを引用し決定している。表と裏の空間秩序によって会議や街との接点を持つ表と、個人ワークや休憩所としての裏を反転するオフィスワークへと変化する。そこにはワーキングといったような働き方や、職の場に住の場が溶け込むような新たな関係性が生まれることを意図している。



図9 case study「オフィス」

### 5.3. case3 「広場」

case3 ではひだが都市スケールで表と裏の空間秩序を生み出し、その上に都市機能を担保する矩形が存在するように設計した。それにより、駅への導線、店舗や広場という流動する表の場に絡まるように、滞留する裏が存在する関係性が成り立つことを意図している。またプログラムを持つ矩形に対しプログラムを持たないひだが「職や住」や「都市と個人」というさまざまな関係性を持つ都市を成立させている(図10)。

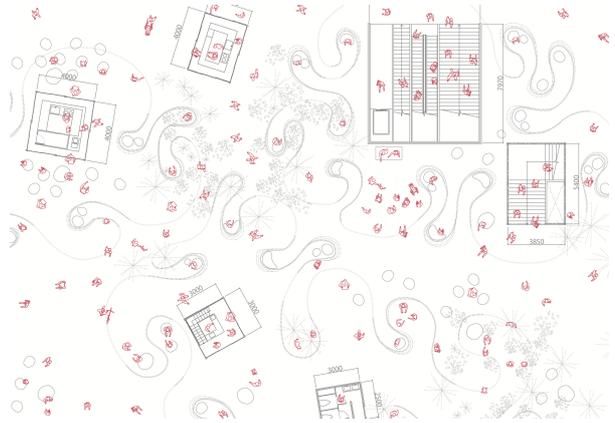


図10 case study「広場」

## 6. まとめ

「表と裏」を心理的概念と物理的概念の二視点から空間秩序・空間認識を考察した。第一段階として心理的表裏の性質・特徴を分析し、心理的表裏の性質を明らかにした。

また既存空間から表と裏の要素やイメージを抽出し、分析したことで、心理的表裏と物理的表裏に相関性を持つことがわかった。次の段階では、心理的表裏を空間化する手法として物理的表裏を利用することで空間設計手法の検討を行った。また心理的表裏の性質から得られる空間モデルを用いてプランスタディを行った。既存のプランは解体され、住と職、都市と個人が同居可能な空間性を心理的表裏の新たな空間秩序によって成立させた。表と裏を行き来しながら暮らす風景がこれからの都市風景をつくる一助になることを期待する。

## 注、引用

1) 土居健郎、『表と裏』、弘文堂、1985年、p15

## 他参考文献

- ・ 森本哲郎、『日本語 表と裏』、新潮社、1985年
- ・ 南後由和、『ひとり空間の都市論』、ちくま新書、2018年
- ・ 笹尾和宏、『PUBLIC HACK』、学芸出版社、2019年
- ・ 青木淳、『原っぱと遊園地』、王国社、2004年
- ・ 岡本太郎、『沖縄文化論・忘れられた日本』、中公文庫、1996年
- ・ 和辻哲郎、『風土』、岩波文庫、1979年
- ・ 芦原義信、『街並みの美学』、岩波文庫、1990年
- ・ 谷崎潤一郎、『陰翳礼讃』、中公文庫、1975年
- ・ エドワード・ホール、『かくれた次元』、みすず書房